



春に多い病気

ケアタウンひまわり 施設長 田中 隆士

インフルエンザに悩まされた寒い冬が終わり、野山に新しい木の芽が吹くこの季節は、自然環境も変わりますが、体調も活動期に入るために、体内の代謝・内分泌系環境が変わり、この季節特有の病気が認められます。先ず、春先の「杉の花粉症」が挙げられます。2月から4月にかけて多く罹患します。これは、戦後住宅資材を獲得するために、杉の植林が奨励されて杉林が増えた為です。これに加え、偏西風により中国大陸から黄砂・光化学ダイオキシンが飛来し、症状を増悪をします。抗ヒスタミン剤が適応です。

次に「春眠暁を覚えず」と昔から言われている過眠・睡眠障害があります。前述の如く体内の環境の変化によるものです。したがって、「早寝・早起き」を励行し、規則正しい食事を心がけてください。

更に、進学・就職等により、飲酒の機会が増え、所謂「一気飲み」等による「急性アルコール中毒」が報じられますが、周囲の先輩諸氏の心使いが必要かと思われず。加えるに、進路確保の為に頑張つて深夜まで勉強に励んだ方が多いと思われるので、進路達成後の「視力検査」で「視力障害」を指摘されることがありますが、一過性のことも多いので、専門医の精密検査が必要です。

最後に、特に女性方には、この季節は気温に比べて紫外線が強いので、「日焼け止めクリーム」や「日傘」を用いて紫外線予防対策をいたしましょう。

ケアタウンひまわりの取り組み

ケアタウンひまわり 小沼 松実

ケアタウンひまわりは法人内で唯一の老健施設であります。

老健Ⅱ介護老人保健施設は、介護を必要とする高齢者様の自立を支援し、家庭への復帰を目指すために、医師による医学的管理の下、介護・看護はもとより、理学療法士・言語聴覚士等によるリハビリテーション、また栄養管理・食事入浴などの日常生活サービスをご利用者ひとりひとりの状態や目標に合わせたケアサービスを提供し、医師をはじめとする専門スタッフが、夜間も安心して体制を整えている施設です。

ケアタウンひまわりは、福島市内の国道4号線、伏拝交差点沿いにあり、交通面のアクセスはもちろんですが、施設からは福島市内を一望することができます。県内の老健施設では、数少ない全室個室の施設であり、ハードの面でも非常に恵まれた施設となっております。当施設で現在力を入れて取り組んでいる事としては、老健の役割機能でもある「在宅復帰支援」と「在宅生活支援」があげられます。

在宅復帰支援とは、入所時より、ご利用者ご家族と一体になって計画的に在宅復帰を支援する取組で、多職種でのチームケアに加えて、ご家族とも緊密な連携を図ることで、安心して在宅復帰ができるようにサポートを行うものです。

退所が近づいてきたら、家屋調査・改修、介護方法や栄養指導、主治医や居宅ケアマネ・在宅介護サービス等との連絡調整を行い、スムーズに在宅復帰ができるように支援しております。在宅生活支援は、無事「在宅復帰」を果たしたご本人、ご家族が日々の生活が安心して送れるように、当施設に併設している、通所リハビリとショートステイをご利用していただくとともに、他事業所との連携を

行い、在宅復帰してからも引き続き支援を行い、在宅での生活を続けていただけるようにサポートを行うことです。老健の中でも、在宅復帰率50%以上を達成している施設を「在宅強化型」、30%以上達成している施設を「在宅支援加算型」と呼んでおり、当施設は現在30%以上の在宅復帰支援を行っており、在宅支援加算型となっております。

全国の老健では、在宅強化型で9.1%、在宅支援加算型で23.2%と、両方合わせても全体の3割程度しか在宅復帰支援を行っておらず、県内に至っては、在宅強化型で4.4%、在宅支援加算型で8.8%、両方併せて13.2%と、福島県の老健施設の1割弱の施設しか取り組んでいない事を実践しております。これからも地域の選ばれる老健になるという事はもちろんですが、社会福祉法人清樹会の施設の一つとして「ともに生きるよるこびを」の理念を実践していきたいと思っております。

理想の地域

高齢者等複合型施設 逢座 力丸 純生

去る、2月20日に、「ケアカフェ」おこりやま」という催しに、初参加させていただきました。この催しは、郡山地域の医療従事者、福祉従事者、地域住民の方々が集い、毎回違った1つのテーマについて、1グループ5名程度に分かれ、それぞれの意見や思いを語らう集まりの場でした。

今回は、「理想の地域」というテーマについて、参加された皆さんが活発な意見を出し合っていました。私がこのテーマで、思っていた「理想の地域」とは、私の妻の実家がある、県南地域のある村でした。

なぜ、この地域が理想の地域と感じたのかと言つと、地域の縦・横の繋がりがしっかりと残されているからでした。日本の戦後間もない頃の地域社会は、一つの屋根の下(世帯)に何世代もの家族が肩を寄せ合い助

け合いながら暮らしを共にし、また近隣の住民もお互いを助け合いながら地域社会を支えていました。しかし、高度経済成長期に境に経済が豊かとなり、人々の考えも大きく変わり、家族の形も肩を寄せ合い助け合う家族の形から、各人が自分の家を持ち、部屋を持ち、自分の生活を中心に考える家族の形へ、地域社会も個人だけを考える社会へと変貌を遂げました。私が「理想の地域」と思うこの村には、高度経済成長前の地域社会体制がまだ残っており、私の妻の実家には、私たちの世代を中心に、3世帯(4世代)が一つの屋根の下で生活を共にしています。一例ですが、私たち世代に子供が生まれ、大きくなるまで、仕事を現役でしている私に変わって、祖父母が子供の面倒を見てくれました。

また、祖父母が体調を崩し床にふせた時父母世代・私達の世代が祖父母の看病をし、ひ孫たちは純粋な言葉で祖父母を励ました。祖父母はひ孫の言葉が「何よりの薬」だともよく言っていました。また、近隣の方も祖父母を心配して、毎日顔を出し様子を見に来てくれ、看病が忙しく買い物に行く事も出来ない私達に、「看病が変わるから行ってきな」など声をかけて頂いた事もありました。これが私の理想とする縦と横が助け合う地域社会です。逢座が一つの地域社会となる為には、各事業体がこのような助け合い・繋がりを持つ事に意識をし、さまざまな場面面で形を変え、縦の繋がりが(家族)時には横の繋がりが(地域住民)にも変化できるように、私達は家族・地域と言う事を見据え運営を行わなければならないと考えます。

また、この建物内だけに目を向けるのではなく、外にも目を向け今まで行ってきた地域社会の営みを特別なものとせず、私達ひとり一人が意識し地域と歩み、住みやすい地域社会づくりが出来るよう、職員一同前に歩めるよう努力してまいります。